The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	まこと第10号別冊 ： なにわ文華と国立劇場
Author(s)	辻野, 直三郎
Citation	makoto. 1975, 10, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86234
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

まこと第十号別冊

なにわ文学と心立劇場

直堂

浪速文華と国立劇場

財団法人 大阪防疫協会理事長
辻野直三郎

はじめに

このたび大阪府、市、大阪商工会議所が一体となって、かねて大阪に国立劇場（仮称）設立について政府に五十年度予算に計上かた要請がこのたび文化庁の支援によって認められこれが調査費が計上されたが一市民として双手をあげて歓迎するとともにその喜びと速やかな実現のため敢てここに拙文を草する。

浪速文華の発生とその背景

古代難波（なには）の宮跡を象徴とするなには文華、それは浪速の土地とその環境に育（はぐ）くまれた庶民生活の「やすらぎ」と「うるおい」である。その文華の発生の基盤というかこれの支えとなった地域の気候、風土とここに住む庶民の知慧（ちえ）とその結晶である。

地域!!この大阪府は摂津、河内、和泉を以て構成する。地形は大阪域附近を起点として脊梁骨をなす高地が南に延び天王寺阿倍野を経て住吉に達する上町台地、この台地の西側は近世まで海が入り込んでいて、難波（なには）江とよばれ淀川の旧河口は難波の御津（みつ）といい畿内（きない）、京都の周囲なる「山城、大和、河内、和泉、摂津の五箇国の旧称」と瀬戸内海、九州地方とを結ぶ要港であったから附近は古くから津国（つのくに）と呼ばれた。大阪市内中心地の繊維問屋街のある所に「船場」の地名が現存するが、その昔を偲ぶ船着場であった。この大阪は近畿中央地帯の西端に位いし北は京都府東は奈良県南は和歌山県西は兵庫県に接続し大阪湾にのぞむ面積一八五五・三三㎢世帯数二四八〇、六四九　人口八一八四、九二〇人（四九、一〇、一現在）南、北、東に葛城金剛山系、北摂箕面山系、信貴生駒山系、和泉山系などの山地と大阪湾の対岸淡路島によって囲まれる。大阪低地は瀬戸内陥没地帯の東部に位いする海の盆地であったが、その東半は淀川、大和川などの堆積作用により大阪平野を形成した。気候は大阪湾の影響を受けて凡そ温暖で年平均気温は15℃である。しかし海岸から山間部に至るに従って気温は低下し北部南部山間地では年平均13℃前後、冬季にはまれに氷点下以下となる。ただし都市においての気温は次第に上昇をたどっている。降水量は年平均一、三〇〇㎜程度で瀬戸内性（少雨）の気候地域に含まれている。月別最多降水量は梅雨の六月と台風季の九月に現われる。夏季の七、八月の日でり、少雨のつづくことがあり霜、雪も比較的少なく霜害は山間を除いて僅少であり積雪は年二、三回にすぎない。風は西に開いた地形の関係上一般に西風が強くことに冬季の季節風は強い西風が続く。この温暖な気候と近畿第一の広さをもつ大阪平野、海の交通の要路である瀬戸内海に通じる上、古都の奈良、京都の玄関口にあたるという地理的条件に恵まれかつ、浪速文華を支える基盤の大きな柱らにはなにわ商人を育くみ日本の経済的中心としての発展をもたらした。とくに江戸時代には商都としてめざましい繁栄をとげた。

この商都としての特色と長い伝統は権威主義とは無縁の合理的精神をはぐくみ、私学の勃興と共に現実的庶民的な浪速文華を発展させたと考えられる。

その言葉の一端に、たとえば大阪商人の朝の挨拶に「もうかりまっか」いや「ぼちぼち」にはじまり「おますか」いや「おまへん」等々地名も天神橋六丁目は「天六」上本町六丁目は「上六」などと簡略して呼ばれるなどコンピューターの現代にもなお船場、丼池（どぶいけ）などは今尚算盤（そろばん）が多く使用されている。

次に浪速びとの食糧を賄（まか）なって来た三平野を形成した二大河川、大和川、淀川について一言致したい。

イ　大和川　水源を京都府笠置山地の初瀬川に発し佐保川、飛鳥川、葛城川、富雄川、竜田川などの盆地の諸河川を合わせ生駒山地の南麓を横谷をなして大阪平野に流出し柏原市から石川を合せて西流し堺市の北で大阪湾にそそぐ。全長六四㎞流域面積一〇七〇㎢かって柏原市から北流して大阪城の北で淀川に合流していたがはんらんの害甚だしい為めに一七〇四年（宝永一）現状に切りかえたものである。河床は砂礫のたい積大で舟運の便はないが河水はかんがい用水として又下流の伏流水は堺市の上水道、工業用水に用いられている。

ロ　淀川　滋賀県琵琶湖を水源とし近畿地方の中央部を斜めに流れて大阪湾に注ぐ大川。長さは琵琶湖流出口から新淀川河口まで七五㎞流域全面積七三〇五㎢内琵琶湖流域四八％支流で木津川流域二〇％桂川流域一四％初め瀬田川となって琵琶湖から流出し京都府に入って宇治川と呼ばれ山崎の狭隘（きようあい）附近で右岸から桂川、左岸から木津川の二大支流を入れる。桂川の上流は大堰（おおあらい）川で丹波高地南京都の水を集めて保津川となって亀岡盆地を流れ嵐山をすぎて京都市街を貫流する鴨（賀茂）川を合せて桂川となる。木津川は伊賀盆地の水を集めて笠置山地を横断し木津をすぎて北西流して淀川にそそぐ。二大支流を合せた淀川は大阪平

野を南西流して河内と摂津の境をなし下流でデルタに大阪市を発達させている。途中江口で神崎川を北西に分け毛馬（けま）で南流し旧大阪市街に入る。大阪城の北方で寝屋川を合せて西流し堂島川と土佐堀川に分れて中之島をはさみ安治川、尻無川、木津川に分流して大阪湾にそそぐ。これらを結んで市内に東横堀川、道頓堀川などの運河があった。しかし一九〇三年毛馬に閘門（こうもん）を設けて旧市街に入る水量を調節し旧中津川流路を利用して大阪湾へ直線の放水路を建設したので今は新淀川が本流となっている。

浪速より大阪へ経済都市として発展して来た所以（ゆえん）のものはその一つに川は（運河を食む）古来人間社会の成立や発展と最も密接な関係を保ってきた。飲料水の獲得はもちろん集落の発達や生産、交通、交易はもちろん政治的境界線その他幾多人間の活動と川とは歴史的に全く不可離の関係に立ってきた。特に大阪のごときは川、運河が市内縦横に発達して物資の交流を盛んにしたその例として江戸時代には堂島川に面した水運の便のよい中之島、堂島、土佐堀、江戸堀などに諸藩の蔵屋敷が置かれた。これは各藩で年貢（ねんぐ）の米を換金するため大阪に運んで処分した。米市場はそれによって行なはれたものであるが同時に自国の産物を買い上げて大阪で売りさばくようになりその運営のためにつくられた蔵屋敷であり、その数は元禄のころ九五、天保の末には一二五を数えた。多くは水運の便のよい中之島附近に集まっていた。これら川の治水功績者としては河村瑞賢、安井道頓および木津勘助の名を忘れてはならないと思う。

大阪城　東区杉山町（特別史跡）

天下の名城、浪速のシンボルと称せられる大阪城は府民に親しみの深い豊臣秀吉の築城になる。秀吉は大小名に命じて、三〇余国から数万の人夫を徴発し一五八五年（天正一三）に工事をおえた。城の外郭は北は淀川、東は玉造、西は東横堀川で限り周囲約三里八町（一里は三・九二七Km）当時、最大の城郭であった。内郭は本丸を一段高く石垣で築き天守を建て南の広場に「殿館」を建てた。殿館には「大玄関」「千畳敷大広間」「大台所」「黄金奥斗付之間（おおどんのしつきのま）」で田楽之間（でんがくのま）」「鎖之間」（くさりのま）などがあったがその規模を的確に知りうる資料はない。

本丸大手は桜門で本丸の北に一段低く山里丸があり本丸、山里丸を合せて二二、〇〇〇坪（一坪は三・三〇五m^2）二の丸は本丸をかこむ周辺の地域で「真田郭（さなだかく）」「条丸郭」「算用郭」「前島郭」がありその外を三の丸がかこみ総面積は一〇〇万坪をこえる。大阪冬の陣以後、家康の奸計（かんけい）にかかり外郭をこわし堀を埋め二の丸から外は破壊された。夏の陣後徳川家康は大阪城を松平忠明に与え忠明はこれを修築しやや旧に復したが一六一九年（元和五）江戸幕府はこれを直轄とし城代をおいて明治維新に至った。その間一六二〇年に西国、北国の諸大名に課して大修築を行い面目は一新され家光も一六二四年（寛永一）および二八年に修造し天守を再築したが一六六五年（寛文五）雷火で焼けた。現存する本丸の巨大な石垣、天守台などたいてい徳川氏の築工によるとされているがこの後もたびたび雷火をこうむり修理が行なわれたが一八六八年（明治一）城中失火して本丸二の丸の大部分が焼失した。明治維新後陸軍省の所管となり大阪鎮台（ちんだい）後に第四師団司令部ならびに兵器廠（しょう）。江戸時代の三の丸には陸軍造兵廠大阪工廠が置かれていた。櫓（やぐら）門、火薬庫、金蔵（再建された）など若干の建物が現存する。そのほかに限存する建物は本丸大手の桜門、二の丸に乾（いぬい）櫓、（重要文化財）千貫櫓、南曲輪に一番櫓六番櫓、大手門などがある。この中で乾櫓が手法最も古く元和の修築に他より移築したらしく千貫櫓はそれにつぎ元和ごろと思われ一番、六番両櫓は寛文の大改造と思われる。現在の天守閣は昭和六年今上陛下の御即位記念事業として大阪市が完成したものである。地上三九・八mの高さである。桃山建築の様式をとりいれた鉄筋コンクリート造、延べ一、五四三坪高さ五六m（石畳上四二m）におよぶもので内部にエレベーターがある。閣内には桃山時代の美術品が常時展示され、また内堀内と大手門付近、ならびに大手前広場は大阪城公園となっており「金明水」「銀明水」の井戸「肥後石」「蛸（たこ）石などの巨石その他の史跡が多い。読売新聞社主催大阪府、市、協賛のもとに毎年九月下旬から一週間にわたり大阪城を中心とした「大阪祭」の一貫として豊太閤の行事が盛大に行なわれ親しまれた浪速の行事となっている。

大阪湾

六甲山地、生駒（いこま）山地、和泉山脈、淡路（あわじ）島の低い断層海岸と四方を断層山地でかこまれた海湾で茅渟海（ちぬのうみ）とも呼ばれ、また難波潟（なにわがた）とも称した。北東ー南西方向の長軸、北西ー南東方向の短軸をもつほぼ楕円形で東半は二〇m以下の遠浅の海底をなし西部にいたるほど深度を増し淡路島北部海岸付近で最も深く六〇mを示す。明石（あかし）海峡によって播磨灘（はりまなだ）と紀淡海峡によって紀伊水道と連絡しせまい海峡部ははやい潮流がおこる。沿岸の尼崎（あまがさき）や大阪港付近では近年地盤沈下し泉南海岸とくに泉佐野以南では侵食による汀線（ていせん）の後退が激しく三〇年間に二〇m後退し砂浜なく絶壁をなす個所もあり防潮堤の建設などによりその補強に努めている。また沿岸は阪神工業地帯の工場が連なって汚水を流出し漁獲は少く都市地域から離れた和泉海岸淡路島沿岸が主漁場となっている。湾岸の大阪、神戸の二大港は四国、

九州などの内国は勿論外国航路の汽船が出入し西に開き淀川の堆積作用をうける自然条件の悪い大阪湾では内港計画など整備強化に努めている。近年は堺など大規模の石油コンビナートなど臨海工業地の造成と工場地帯からの排水による汚染で海水浴はほとんど不可能となっている。

大阪港

地理的に恵まれているため難波津と呼ばれた上代から既に海陸交通の要点としてまた大和地方の玄関として中国、朝鮮などの大陸と重要な交通路として栄えた港である。昭和四八年の入港船舶は十一万五千全隻（総トン数約八、四〇〇万噸で同三五年に比し隻数四〇％、総トン数では二倍強の増となっており、また貨物取扱量は約七、五五〇万噸と同三五年に比べて三倍弱で日本経済の恒常的貿易黒字国としての地位の確立を背景に、一層商業的色彩を強めている。

〒大阪市章と、みおつくし（澪標）みおつくしは澪（みお）（水尾の意で水の浅い海や川路となっている深みをいう）を示す標竿または水杆（もくかん）のことで現代は浮標を碇置（ていち）して舟便のしるべとしたものである水の都大阪がその象徴として〒（みおつくし）が大阪市章に取り入れたのは明治二七年四月である。

柴島（くにじま）浄水場

東淀川区柴島町

大阪の上水道をうけもつ大阪市営の浄水場でこのほかに守口市に庭窪浄水場、寝屋川市豊野浄水場がありこの柴島浄水場が最大の規模である。淀川を水源とするこの浄水場は一日約一〇〇万㎥の水を大阪市内に送っているがその前身は明治二八年一一月一三日横浜、函館、長崎についで四番目に完成した「桜の宮浄水場」で大正二年ここに新たな浄水場を設けた。大阪市ではこれら浄水場の拡張工事を八回も行ない、昭和五〇年を目標に日量約七〇万㎥の給水能力の増加をはかることにしている。この工事が完成すれば柴島浄水場だけで日量約二〇万㎥の給水能力が増加されることとなる。このように浄水場が増設完備することによって消化器系伝染病はさらに次第にその発生源を失なうと共に文化生活に寄与すること大であり庶民生活えの大きな贈物となる。

大阪商人の変遷

昭和四五年十月一日現在の十五才以上の労働力状態は就業者数三六八〇、二八九人そのうち商業就業数（製造業）九〇七、四三五人で二四・六七％工業者数（卸売業小売業）は一三九六、一一三人で三七・九七％合計で六二・六四％であと三七％余がその他である。これを見ても尚現在の商都経済都市としての姿を判然とするがその歴史をたどってみるに近世の大阪が商業都市経済都市として発展する第一歩は豊臣秀吉の大阪築城後に踏みだされた。

秀吉は城下の繁栄をはかるため既に海外貿易などで発展の堺や、平野の商人を移したが堺から来た商人は従来の気風そのままで豪放で気位も高かった。大阪落城後伏見の町人が移され更らに近江（おおみ）その他の地方の商人も来住した。江戸時代の大阪商人の一般的性格は近江商人のそれが継承され発展したものである。近江商人は忍耐強く勤勉で倹約心に富みそれに豊かな商才をもっていたからまさに典型的な商業資本家で近世後期大阪の商業は彼らの支配下？にあったともいえるか。大阪町人の資力の充実に対しては封建権力もその前に頭をさげなければならなかった。しかし彼らはついに封建鎖国制度下の町人でその意識はある程度進歩的なものをふくみつつもなおそこには限界があり彼らの活動を封建的束縛から完全に解放しようとする積極的意図をいだくまでには成長しなかった。明治維新後における大阪の経済的発展は従来の大阪町人によって推進されず彼らは五代友厚のような他国武士（薩摩藩）出身者の啓発によって進むべき道を見いだしている。

維新後新時代に適応ができなかったものは没落した。しかし一方では新興実業家とともに商工都市大阪の構成分子または重要分子となって発展をとげたものも少くない。大阪商人が商業分野から工業その他の分野え大きく進出したのは明治以後である。同時に企業の規模は拡大され近代化して、いよいよたくましい商魂の発揮となったが反面久しく旧態依然たるところもあった。第二次世界大戦後における不振は一時的現象で現在における回復はめざましい。政治は政治、商売は商売と割りきって行けるかどうか？維新後に形成された一般的意識を発展させることが経済都市としての生方ではあるまいか。

一九七〇年（昭和四五）日本にはじめての日本万国博覧会が吹田千里丘陵で世界注視下にユニークな「人類の進歩と調和」の標語のもとに開催、入場者実に六千四百二十一万八千七百七十人万国博覧会史上空前の大成功をおさめた所以のものは行政当局指導のよろしきと府市民一体となり経済都市としての意気を如実に示した世紀の祭典として歴史にのたる盛事であることを。なおこの日本万国博覧会場跡地利用は緑のすくない大阪としてその主標は体育と健康のため、「緑と森林公園」とすべきことを提言する。

この経済の中心をなす大阪にふさわしい日本唯一のしかも世界にほこる建物が（北区新川崎町）ある。造幣局がそれである。造幣局は明治四年四月四日創立、以来昭和四六年四月をもって創業百年を迎えた。昭和四十八年度末までに製造した貨幣は実に八八種約五二六億枚をかぞえた。なおこのほか勲章、褒章および金属工芸等の製造、貴金属地金の精製、品位証明、地金鉱物の分析および試験を行なっている。この地造幣局の桜の通り抜けは通常四月中旬より一週間行なわれ市民に開放されて日本人の心とされる桜の観賞といこいの場に供せられ、したしまれている名

所でもある。

町人の学問（塾）

おもに江戸時代に教師の自宅を教場として教師その人の奉ずる学派または流派によって統卒された教育機関（場所）といえる。いわゆる幕府または藩主等為政者や藩の保護（官学）を受けず自主的或いは商人の財政的援助を受けて運営したもので、その特質は第一に教師その人のもつ学問と徳とを中心として、それに慕い寄った学徒によって展開された共同学習場であったこと。第二に学問、武芸など一派一流の道統にもとづいて行われた。そのおもな塾について次に掲げる。

イ、適（てき）塾または適々塾

重要文化財、史跡、大阪大学管理　北浜三丁目所在

緒方洪庵先生一八一〇～六三）は江戸末期の蘭学者医家、名は章、字公裁、洪庵と号した。備中足守の人十七才の時医学を志して大阪に出て中天遊の門に入った。二十一才の時さらに江戸に赴き坪井信道、宇田川玄真らについて蘭学を修む。一八三六年（天保七）長崎に行きオランダ医ニーマンに従って研究を積み一八三八年（天保九）大阪に帰り開業した。かたわら蘭学塾「適々斉塾」（適塾）を起し多くの人材を育成した。明治年間活躍したなかには適塾出身者が少なくなかった。

村田蔵六（後の大村益次郎）福沢諭吉、長与専斉らを出した。また佐野常民、橋本左内、大鳥圭介、久坂玄瑞、箕作秋坪らもこの塾に学んだ。かたわら「病学通論」コレラ対策書「虎狼痢治準」ドイツ医フーフェラントの著書の訳「扶氏経験遺訓」などの訳書を公にし西洋医学の普及につとめ近代日本医学の樹立に大いに功績があった。一八六二年（文久二）江戸幕府から招かれて「奥医師兼西洋医学所頭取」となった。塾の建築様式は江戸時代の船場中流の商家の建築で殆んど当時そのままを残している。住民のほか土蔵と納屋があり一段の奥の方が洪庵先生の家族の住居にあてられ二階の二七畳の大部屋などが塾生のために使われたという。

ロ、懐徳堂（かいとくどう）

東区高麗橋四丁目日本生命本館所在。大阪市顕彰史跡「大阪市の文化財」一九七三大阪市教育委員会編によれば「中井氏は代々儒学を家の学問とした。大阪における私立学問所の先駆、懐徳堂を一五〇年にわたって経営し文教の維持、発展に貢献した。懐徳堂は中井甃庵（一六九三年～一七五八年）の創設にかかり蔭に篤志の大阪町人（三星屋武右衛門、道明寺屋吉左衛門、舟橋屋四郎右衛門、備前屋吉兵衛、鴻池又四郎）の協力があった。享保一一年（一七二六年）幕府の公許を得たため規模を拡張することとし、尼崎町一丁目に学舎を設けた。現在日本生命の本館があるあたりで今橋通りに面して記念碑が建てられている。全盛期は中井竹山（一七三〇年～一八〇四年）中井履軒（一七三二年～一八一七年）の時代でその実力は江戸の官学昌平黌（しようへいこう）をしのぐとさえいわれた。明治二年の学制改革によって廃絶したが今もなお市民の手で懐徳堂記念会が結成され、その遺業の顕彰につとめている」とある。塾の初代学主は中井甃庵の師三宅石庵で、一七八二年（天明二）甃庵の子竹山が学主となると全国から学徒が集まり本校の全盛時代を現出した。なお竹山は学風をもっぱら朱子学派によって統一し他の学派をしりぞけた。一八〇四年（文化一）竹山が没しその弟履軒があとをうけたがしだいに衰え一八六九年（明治二）に至って学制改革のため廃絶した。

ハ、洗心洞（せんしんどう）

北区新川崎町造幣局官舎街・所在

江戸時代後期の儒学者大塩平八郎（一七九三～一八三七）の主宰（さい）する塾、名は後素、字、子起、通称平八郎中斉と号し、その家塾を洗心洞と称した。生を阿波に享け親族にあたる大塩家の嗣子となる。大塩家は大阪町奉行所の与力「与力は二百石の扶持（ふち）と五百坪の屋敷とを給されていた」であり、家は天満川崎にあった。

父敬高と母とを幼時に失い祖父のあとをついで東組与力となるや、やがて東町奉行高井山城守実徳に認められて吟味（ぎんみ）役となり豊田貢の邪教事件の処断、破戒僧の処罰などいわゆる三大功績をあげて名声を高めたが一八三〇年（天保一）高井町奉行の辞職に際して養子格之助に職を譲って隠居した。この間二十才の頃から学問に志し、その師は不明とされているが陽明学をするようになった。隠居後は私塾を開いて門人を教えまた「古本大学刮目」「洗心洞劄記」などの著述に専念した。一八三七年（天保八）うちつづく饑饉（ききん）による農民、下層民を救い奉行や諸役人、豪商を誅伐（ちゅうばつ）せんとした「大塩平八郎の乱」を起したが敗れて自刃した。その思想の根幹は陽明学よりでた人欲を去って精神の純粋性を実現することにすべての道徳の眼目があるとする「唯心論」的なものである。形式的道徳の虚偽をはげしく憎んだ点にその悲劇的な最後と照応するものがみられる。

頼山陽と親交あり門人の中では宇津木靖（号静区）がとくにすぐれている。

陽明学について一言つけ加えたい。

陽明学は中国明代中期の王陽明により儒教革新の立場から構成された学と称せられ儒教の実践性を回復することを意図して、「知行合一」を主張した「行」を離れた単なる「知」は存在しないこと、また知は行によってはじめて真の知となるという理論は南宗の陸象山の「心即理」説を背景としている。理と心との分裂という事態は理を知の問題とし心を行の問題として二つ

に分けて考えるからで心の中に理は内在しており本来心と理は一つのものであるから理を知るとは儒教の古典に書かれた理を知的に理解することや外的な宇宙の理法を直観することではなく行によって心の理を発現することなのである。日本における陽明学は中江藤樹によって始まるが陽明学の思想の流れは日本では公然と一つの学派を構成する運動としてはあらわれなかったがその信奉者は絶えない。私事ではあるが筆者は洗心洞文庫で数年間戦前藤沢黄坡先生より論語をその他の先生より伝習録の講義を受ける機会に恵まれた。

ニ、泊園書院(はくえんしょいん)

大阪市顕彰史跡

東区淡路町一―一六所在

懐徳堂、適塾と並び称された儒学の私塾で讃岐に生れた藩士藤沢東畝、(とうがい)南岳、黄鵠(こうこく)黄坡(こうは)先生と四代にわたって主宰され大阪における文教の維持発展に大きな足跡を残している。東畝が中船場町(東区淡路町五丁目付近)に泊園書院を開いた文政八年(一八二五)のころすでに儒学はひろく庶民の間にも普及し一般人には欠くことのできない教養となっていた。東畝はみずから泊園学を樹てたほどの博学の人であったから学徳を慕って従学する人も多かったが一時は中絶、明治九年になって南岳が再興した。この淡路町一丁目の塾が最も有名で大阪儒学の中心的存在だったのである。四代一四〇年にわたって蓄積された二万冊にのぼる典籍は関西大学に寄贈泊園文庫として保存され、泊園記念会も結成されている。ちなみに作家藤沢桓夫氏はこの子孫である。

ホ、梅花社(舎)

一七七六年(安永五)篠崎三島が土佐堀白子町の隠居所に開いた私塾で好みの梅を植えたのでそれにちなんで命名した。小竹、竹陰と受けつがれ八〇年にわたり育英につとめ文運を開いた。弟子に奥山小吉、安藤秋里、橋本香坡などがある。

そのほか江戸時代の私塾の一つ石田梅巌が大阪町人井上宗甫(三木屋太平衛)の私宅の一部を開放して「心学明誠舎」(南区長堀橋一丁目所在)を開いた。また松本圭堂、松林飯山、岡鹿門によって「双松岡塾」(大阪大学病院前庭)を一八六一年(文久元)にひらいたが幕府の圧迫によって半年後で解散した。残念ながら詳細な記録は入手しがたい。

国立大阪大学

北区常安町中之島四丁目

明治二年上本町四丁目大福寺内に仮病院を設けて緒方惟準先生を院長としオランダ人ボードウインを招いて一般の病気診療のかたわら医師の教育をしたのがはじめで翌三年鈴木町の代官所跡に移転したが同四年には高橋正純が院長となりオランダ人エレメンスが治療にあたることになった。同六年十二月に大阪公立病院と改称して北御堂内に開院現在地に教授所が置かれ同十三年に府立大阪医学校と改称された。大正七年石橋(池田市)に予科を設け同時に大阪医科大学設立の認可があったが昭和六年官立大阪帝国大学医学部となり以来学部の増設病院各種研究施設を充実し戦後は大阪、浪速両高校(旧制)を吸収合併して文科系統を新設し現在に至り一部学部は吹田市千里丘陵に移転している。

大阪大学微生物病研究所

吹田市大字山田上

大阪大学微生物病研究所の誕生は昭和四年にさかのぼる。当時の大阪医科大学(昭和六年大阪帝国大学に移管)学長楠本長三郎先生と細菌血清学教授谷口腆二先生は大阪、神戸がコレラ、ペスト(検疫伝染病)などの外来伝染病の侵入門戸となりつつあったことから微生物病に関する総合的研究機関を大阪に設置しなければならないと説き当時の大阪府知事や財界の有力者に協力を要請した。その結果山口厚生病院の寄附者山口玄洞氏の賛同を得て二〇万円の寄付を受け昭和八年医学部附属病院東側に建築を着手し昭和九年竣工した。昭和四二年十二月静穏な環境その他諸要件、および立地状件などに恵まれた現在地に移転が行われた。細菌血清学部門など一五部門にわたる広範囲にわたり斯界に貢献(こうけん)するとこ大である。

なお初代所長は古武弥四郎氏で現八代所長は堀三津夫先生である。

娯楽と歓楽地帯

イ、道頓堀

道頓堀は道頓堀川に沿う南岸は一六二八年(寛永三)この地の繁栄のため芝居、遊所などの設置が認められた所でかって浪華五座(弁天座、朝日座、角座、中座、浪花座)の並ぶ大阪随一の観楽街をなしていた。今も浪花座、中座、角座、朝日座、松竹座などの映画館、演劇場が建ちならび人形浄瑠璃で知られた文楽座(朝日座)もこの地に移された(元御霊神社前にあった)。

芝居茶屋、飲食店もまた多く存在し南につづく千日前とともに観光ミナミの中心地となっている。

ロ、千日前

千日前は道頓堀の南岸から南方へ金刀比羅(ことひら)神社までの約六〇〇mの間で戎橋と並行する映画館、劇場、飲食店、雑貨店多く、道頓堀につぐ、観楽地である。もとこのあたりに千日寺(法善寺)と称する精舎があったといわれその寺の前だから千日前となったといわれ明治維新前には墓地、刑場であった。

ハ、曾根崎新地とキタ

一六八八年(元禄元)河村瑞賢が堂島川改修の結果出来あがったのが堂島新地であった。ついで一六九六年(元禄九)に蜆川(しじみがわ)を改修して曾根崎新地ができた。その新地開発のために茶店が許されたのが、「北」の新地の起源である。この地におこった情話で「心中天之網島」を近松門左衛門が書いたのは一七二〇年(享保五)でそのころから新地は次弟に栄え蔵屋敷の武士と大阪町人との商

取引の場として利用された。しかし明治四十二年七月の北の大火を期に遊郭は廃止されて次第に衰退をたどった。現在の北は大阪駅、阪急電鉄等を中心とした地域一帯に映画館、劇場、日本最初の梅田コマ劇場、地下三番街その外ホテル旅館、キャバレー遊技場などが集中して「キタ」の観楽街を形成している。

文楽について

人形浄瑠璃文楽とは私見ながら操（あやつり）人形芝居である。人形と人形遣い、三味線ひきに、語る太夫（浄瑠璃）の三者一体により構成される。この人達による修練、熟達の極致（きよくち）によって「作られた人形」が生きた人間の如く動作と感情を表わすものである。詳しくは文楽は音楽的な曲、節によって戯曲的な内容を物語る「浄瑠璃」と、これに伴奏する絃楽器の「三味線」その演奏につれて演技する「人形」の三つの要素から成立するもので、それらが一つに融けあって洗練された舞台効果を発揮する。唯一無二の文化財として内外特に海外から極めて高く評価されている。「人間国宝」として現文楽では三味線の二世野澤喜左衛門本名加藤善一十世竹澤弥七本名井上一雄太夫には四世竹本越路太夫本名小出清及び四世竹本津太夫本名村上多津二四氏がこの栄誉をになっている。

近松門左衛門

一六五三～一七二四年

江戸時代の歌舞伎、浄瑠璃の作者本名杉森信盛、通称平馬、別に巣林子（そうりんし）平安堂、不移山人などの筆名がある。淀の藩士、杉森信義の次弟と称せられている。少年時代公卿（くげ）一条恵観に仕え二〇才の時主人の死にあい近江の近松寺に遊学した。作者になった動機は明らかでない。最も古い脚本は一六六七年京都の都万太夫座における「藤壺の怨霊（おんりょう）」といわれているがその翌年大阪荒木与次兵衛座に書いた名伎「夕霧（ゆうぎり）」の追善狂言「夕霧名残の正月」は伊左衛門の坂田藤十郎、夕霧の霧浪千寿で大当りを記録しこれが出世作となった。近松は世話もの一つの型を作るために努力したのである。一六八五年（貞享二）竹屋庄兵衛という興行師が初代竹本義太夫のために大阪道頓堀に「竹本座」を開場近松の旧作「世継曾我」を義太夫が語った以後引続いてこの義太夫の演奏台本の創作にあたっている。浄瑠璃に「義太夫節」という画期的な新らしい時代を作ったほどの天才と彼はここでも堅く提携しているのである。

一七〇三年（元禄一六）曾根崎心中が浄瑠璃の出世作となった。享保九年十一月二十一日没した。墓は南区谷町八丁目元妙法寺跡にあるも寺は既に大東市に移転している。

竹本義太夫

大阪市顕彰史跡

天王寺区大道一丁目超願寺

竹本義太夫（一六五一～一七一四年）天王寺村南堀越に生れ遇然のことから清水理太夫に見出されこの道に入った。ついに独得の義太夫節を創始して人形浄瑠璃の黄金時代を築いた。若い頃から研究熱心で在来の音曲にあきたらず小唄俗謡（よう）、祭文、万歳といった大道芸から物売りの呼声にいたるまで自家薬籠（やくろう）のものとし将来の飛躍にそなえていたというからさすがに一流の人物である。義太夫には天賦（てんぷ）の資質があったがまた協力者にも恵まれていた。竹屋庄兵衛（金主）近松門左衛門（作者）竹澤権右衛門（三味線）辰松八郎兵衛（人形）といった人びとがそろって元禄一六年五月「竹本座」で上演した「曾根崎心中」は空前の大当りとなり社会戯曲（ぎきよく）世話物のはじまりとして演劇史上画期的なできごととなった。正徳四年「娥歌加留多」（かようたかるた）を上演中病にかかり遂いに惜くも法善寺東門付近の自宅で没した。

人形と人形作者

操人形の頭について一言するに「大阪系の頭」と「淡路、阿波系の頭」とに大別する。ここでいう大阪系の頭とは大阪の竹本、豊竹両座から発生した現行形式による三人遣い又は一人遣いと二人遣いの人形の頭を指し今日の文楽座や明治、大正期に熾盛を極めた稲荷の彦六座、堀江の明楽座、堀江座、四つ橋近松座などに使用された頭をいうので現に地方の人形芝居にも流布している。頭の構成、からくり作者は大阪では古くから大江一ノ谷性を名乗る人形作者が多い。淡路、阿波系の頭は「デコ」と呼ばれている。「デコ」とは土偶の意味だらうが今日の木製の頭にはこの呼び方は適当かどうか。

イ、淡路の頭（かしら）

淡路頭の分類ー淡路系の頭は現在四〇～五〇種類あり主な頭には、からくりの装置のあることは大阪系のように役名で呼ぶことは殆んど稀れで概ね頭の特徴とか役柄を指摘している。即ち角目（かどめ）別師、剣別師、半ドウ、大半ドウ丸目、新丸目、別頭、隅取頭、家老、寄年、内匠（たくみ）、勘平、平作、弁慶その他がある。

ロ、阿波の頭（かしら）

阿波の頭の作者の氏名が古くから相当に伝わっているくらいだから嘗ては人形座の繁盛したであらうことも想像に難くはないのであるが今日では淡路から阿波に移住した上村源之丞すら徳島で劇場主に納まり阿波といわず四国地方は近時淡路の人形座の席捲するところとなりまた人形座そのものの存在が殆んど危険に瀕しているので総ては淡路系統を踏襲しているものと推定される。このように淡路島と阿波が維新前（廃藩置県）までは藩主蜂須賀公に依って支配されていた阿波藩であった関係上からではあるまいか。

ハ、阿波人形作者「天狗久」について

阿波の人形作りを代表する「天狗久」（阿波人形師久米惣七著より）初代天狗久は本名吉岡久吉、安政五年五月二十一日徳島市国府町中村、笠井家に生まる。十六才で和田の人形富に

弟子入り一〇年後に吉岡家の養子となり天狗久を独立した。この人の作に「日下開山」「久義」の銘の作品もある。明治二〇年前後に作ったものが多く残されている。また明治二五、六年頃から硝子目（これまで木目であった）を考案した。阿波人形が写実的になったのはこの人の作品からである。東日の文化映画「阿波の木偶（デコ）」阪映の「淡路の人形芝居」に主演し宇野千代女史の「人形師天狗屋久吉」の小説になっている。昭和十八年十二月八六才の高令で没した。この人の作品四〇余点が徳島県文化財に指定されている。

二世天狗久本名吉岡要初代天狗久長女（しげり）の女婿

現三世天狗久、本名吉岡治、要の二男で幾多の秀作を世に出している。

井原西鶴一六四二～九三年

大阪府史跡南区上本町四丁目

誓願寺内

江戸時代の浮世草子の作者、俳人伊藤梅宇の「見聞談叢（そう）」によれば西鶴は平山藤五という大阪の富裕な町人であったというが井原性との関係をはじめ家系出身などは一切不明である。西鶴自身の言葉によると一六五六年（明暦二）十五才で俳諧を学び一六六二年（寛文二）二十一才のころから早くも俳諧の点をしていたようである。一六七二年（寛文一二）ころ大阪天満宮連歌所の前の宗匠で連俳界の長老であった西山宗因に師事したことが西鶴の生涯に大きな転機をもたらすこととなった。五十二才で没したが辞世「浮世の月見過しにけり末二年」法名仙皓西鶴。

お祭りと仏閣

お祭りは庶民の祭りである。それは貴賤貧富の差別なく参加できる祭りでもある。特に大阪の祭りは夏季に集中する。浴衣（ゆかた）と、はち巻それに兵児帯（へこおび）をしめて足袋をはけば老幼の別なく参加して御輿（みこし）をかつぎ底ぬけの楽しみにふけることができる庶民のお祭りである。夏であれば衣裳（いしょう）など経済的負担も少なくなんの気兼ねもない。これらは夏の祭りであるがために長年に渡って盛んになった合理的な祭典といえよう。この夏祭りは生国魂祭りに始まり住吉祭りで終るといわれる。

イ、天神祭

この天神祭は七月二十五日で京都の祇園祭（ぎおんまつり）東京の神田祭とともに日本三大祭りの一つである。堂島川の沿岸を埋めるかがり火、花火、提灯（ちょうちん）などに照らされた百数十隻の船渡御（ふなとぎょ）は松島のお旅所まで夜をこめて下ったものでその壮観さはまことに水都大阪にふさわしい壓巻（あっかん）であった。その後西大阪一帯の地盤沈下のため橋下の通過がこんなんとなったので、戦後復活してからは反対に上流の淀川公園へ渡御するようになった。お迎え人形といって高さ三メートルもある八幡太郎義家、木津勘助、関羽、その他十数体の人形が幸いにも戦災をまぬがれて船渡御の先導役をつとめ或いはドンドコ船という賑やかな「囃子船（はやしぶね）」が従うなど他の地方に見られない水都の祭風景を展開する。筆者の記憶するところでは昭和の初期にはこの天神祭のために一〇〇万円（現在の数億円に相当するか）の物資が動くといわれ経済都市のお祭りとしての特色を物語っている。ここに記するまでもなく天満宮は天暦三年（九四九）に菅原道真（すがはらみちざね）公を祭ってから天満宮と称するようになった。（北区大江町所在）東門東の辻の西北角には西山宗因の天満宮連歌所「向栄庵」の跡がある。

ロ、生国魂神社（いくたまじんしゃ）

古来難波大社、難波坐生国咲国魂（なにわにますいくくにたま）神社、生玉社ともいう。祭神は生島神（いくしまのかみ）足島神（たるしまのかみ）の二神。延喜の制による名神大社で八十島祭（やそしままつり）の神社にも加えられている。のちの官幣大社。もと大阪城内にあったが豊臣秀吉築城のとき今の地に移されたという。社殿はしばしば建てかえられたがつねに元の様式に従ったといわれる。本殿の復雑に入りこんだ屋根の構造は神社建築中の異例とされ俗に生玉造の名で知られている。

この神社境内で昭和四十二年に始められた生国魂神社の薪能（たきぎのう）も市民になじまれいつのまにか大阪の名物行事になった。暗闇（くらやみ）に映える篝（かがり）火は当代一流の演能に一段と興趣を添え真夏の風物詩と呼ぶにふさはしいものとなった。例祭は七月十二日であるが八月中旬に二日をかぎって薪能は開催される。天王寺区生玉町所在

ハ、住吉大社（国宝）

古事記によれば墨江三前大神（すみのえのみまえのおおかみ）墨江大神、住吉神（すみのえのかみ）ともいう。

すなわち底筒男命（そこつつのおのみこと）中筒（なかつつ）男命、表筒（うわつつ）男命の三神を祭った神社で、古来海上守護の神として漁業者や航海業者の間に特殊な信仰がある。また住吉神は神功皇后の外征に偉功があったというので従軍神とも称せられて武家の間にも崇敬されていた。天武天皇以来しばしば行幸啓があり、ことに遣唐使発遣のときは先づこの神に祈るのを常とした。神階は正一位、延喜の制の名神大社で二十二社の一つ。摂津国の一宮。一九四六年に住吉大社の旧称に復した。国宝「住吉大社本殿」に指定され例祭日は夏越祓（なごしはらい）七月三十一日で古来摂、河、泉一の大祭として有名でありまた六月十四日の御田植神社は重要無形文化財に指定された。この住吉大社のお祭りをもって大阪夏祭の終りと一般にいわれている。有名な反橋（そりばし、太鼓橋）は淀君の寄進と伝えられ、住吉大社神代記と守家在銘の太刀一口は重要文化財に指定されている。

ニ、四天王寺　史跡、国宝

四天王寺は聖徳太子（五七四～六二二年）の創建にかかるといわれ奈良の元興寺と並んでわが国最古の寺院と伝えられる。中門（仁王門）五重塔、金堂、講堂が一直線上にならび中門の左右から延びる回廊は講堂に連なっている。「四天王寺式」伽藍配置の典型として大陸伝来の正統的な方式を伝える貴重な存在である。境内は飛鳥時代の尺度である高麗尺でほぼ一、〇〇〇尺四方を数えるので創立当時の規模をとどめるものと考えられている。伽藍はたびたびの兵火や災害で幾多の変遷を経ているが現存する建築で最も古いものは永仁二年（一二九四）建立になる西門の「石造鳥居」である。また本坊西通用門、本坊方丈、五智光院、六時堂、元三大師堂などは元和九年（一六二三年）の建立で第二次世界大戦の戦火にも免れて遺存しそれぞれ重要文化財の指定を受けた。四天王寺大講堂壁画は読売新聞社、日本テレビ放送網読売テレビによる永代寄進によるもので製作者は日本芸術院賞受賞、日本美術院重鎮、郷倉千靭画伯。画題は「仏教東漸」で名高い、「玄奘法師の事跡を興味深く構成した大作である。

なお四天王寺では「お大師さんの日」毎月二十一日には参詣者多く特に三月春分の日、および秋分の日には境内にある先祖代々の霊を参拝するは勿論善男善女の参詣者は数万人に達し衣類、雑貨、植木、骨董品（こつとうひん）飲食店などの出店多く足のふみ場もないほどの人出で天王寺警察署臨時出張所も警戒にあたるなど殷賑（いんしん）を極めている。

ホ、石山本願寺跡

東区杉山町（大阪城内）

本願寺八世蓮如上人が明応五年（一四九六）に浄土真宗布教道場として開いた石山御坊はその後、石山本願寺として栄え、坊舎を中心に寺内六町の一郭をなして自治的な町をつくっていたが戦国時代の猛将織田信長と十年にわたる合戦の末、天正八年（一五八〇）時の顕如上人はついにこの地を明け渡して和歌山に退去した。そのあとを利用して豊臣秀吉が大阪城を築いたといわれる。城内桜門外東方にある「南無阿弥陀仏」の碑は本願寺跡を記念したものといわれる。

ヘ、北御堂（西本願寺津村別院）

東区本町五丁目

津村別院は江戸時代には漢、韓の使節が来日するごとにその宿舎にあてられていた。慶応四年（一八六八）（九月に明治と改元）正月征討将軍仁和寺宮の本営となり、のち　天皇の行在所（あんざいしょ）となった。明治五年大阪行幸のときも行在所となり、その玉座のあとは「御殿」と称して記念保存されていたが空襲により焼失したことは惜しみてもあまりあることである。

ト、高槻天主堂跡、高山右近碑

高槻市野見町

高山右近（一五五二―一六一五）大和国沢城主高山飛弾守図書の長男として生る。一五六二年（永禄六）父子ともに洗礼を受けた。一五七三年（元亀四）高槻城主となる。天才的武人のみならず、すぐれた茶人でもあり、利休の十哲の一人でもある。口に説くところ身をもって実践し高槻の領民約三万人ことごとくがキリスト教信者となる。これを以ってしてもその人徳を知ることができる。一五八七年（天正一五）秀吉のキリシタン　禁止策に反したため追放されその後一六一四年（慶長一五）一一月マニラで客死した。右近を殉教者として盛大な葬儀が同地で行なわれた。なお一二年間高山右近の居城であった高槻城跡も同地にあり昭和二五年五月に顕彰跡に指定された。

浪速人の台所

なにわ人を賄なう食糧は如何にして行われたか？現在は政府管掌の米類を除き中央卸売市場が中央卸売市場法にもとずいて配給組織の合理化のもとに設立せられた生鮮食料品の市設卸売市場で昭和六年十一月（下福島三丁目）旧来の天満（野菜類）雑喉場（ざこば）靭（うつぼ）の魚類および木津市場（野菜類）を統合したものでもある。これらの旧市場は市内に点在してそのおのおのの機能をはたしてきた。

イ、雑喉場（ざこば）

大阪最大の魚市場の名称であった。大阪市場の起源は明応年間（一五世紀末）といわれるが、一五九七年（慶長二）靭に、さらに一六一八年（元和四）上魚屋町に移り十七軒会屋（問屋の意）と称し冥加金（みようがきん）を納め魚市場としての特権を得た。しかしこの場所が河口に遠く生魚の売買に不便のため鷺町に設けた出張所に人が多く集まり雑魚（ざこ）類を盛んに売買したので鷺町の名はすたれて雑喉場とよばれるようになった。

ロ、木津（きず）市場

昔から大阪人のもとめる野菜類は皆天満市場で取引きされていたが紀州泉南方面からの野菜商人は天満まで行かず大阪の入口の木津村の道路筋で勝手に取引きしていた。時の西町奉行は再三再四これを差止めたが差止めても再開するという奉行所と商人のいたちごっこが百年近くも続き、ついに文化六年（一八〇九）時の代官篠山十兵衛が青物の十三種類を限定して取引きを許可したのが木津青物市場のはじまりである。（浪速区北高岸町）

ハ、天満青物市場

大阪市顕彰史跡

一六世紀のころ石山本願寺の繁栄とともにその門徒衆を目あてに近在する百性たちが本願寺の門前で市を開いて野菜を売りはじめたのが大阪における青物市場のはじめであるが、秀吉が大阪城を築いてからは京橋南詰（城の北門口）の土手下で市場が再開された。大阪城落城後、慶安二年（一六四九）に川向いの片原町（今の片町）に移され、さらに天満へ移転して来たもので淀屋介庵（こあん）の尽力によるといわれる。介庵がこの青物市場とともに堂島の米と靭（うつぼ）の魚の三市場を開い

た功績は大きい。昭和六年安治川口の中央市場へ吸収されその後配給市場となっていたが空襲によって全滅した。その後僅かに市場の形体をのこす程度で昔日の比ではない。（北区天神橋筋、南天満公園）

堺の歴史

平安末（平家没落の時期）一一八五年頃からその名が記録に現われている。鎌倉時代に熊野参詣路の一駅であり摂津、和泉、河内三国の境にあったのでその名が生まれたといわれる。南荘（和泉）北荘（摂津）の二つの集落から形成されていたが南北朝内乱時代から摂、河、泉を背景に畿内の咽喉（のど）首をおさえる位置にある瀬戸内海の港として政治的軍事的要衝の地となり、急激に都市的発展をとげた。一三九九年（応永六）大内義弘が室町幕府と戦ったとき兵火で市街一万戸を焼かれたという繁栄ぶりであった。このような経済的な富裕地であったため東寺、相国寺、住吉神社の所領となり、あるいは細川、大内、山名などの守護大名の支配地、さらには幕府の直轄地となるなどしきりに領主勢力の交替をみた。応仁の乱後は細川、畠山ついで三好、松永などの勢力下に置かれいくたびか戦禍の中心となった十五世紀の末細川氏がここを遣明貿易船の発航地としてから堺は大陸貿易港として発展し博多と並んで明、朝鮮、琉球（沖縄）などの海外通商を独占し堺商人は巨大な利益を収め商業資本的な富の集積を著しくした。堺町人は領主の勢力争いのバランスを巧みに利用し、またその経済的富力を基礎として町民の間に自治的な団結組織をつくり、所謂「地下請」（じげうけ）すなわち自治特権を領主に認めさせることによって都市自立の態勢を強化した。この自治的共同体組織を指導したのが会合衆（えごしゆう）あるいは納屋（なや）衆とよばれる門閥的な富商、長老たちであった。町民は市街を戦火から防衛するために南、北、東の三方に堀をめぐらして町を囲郭し傭（よう）兵隊を編成して一種の要塞（ようさい）都市をつくりあげ一六世紀半ばごろには日本の都市上珍らしい自由都市的な発展をとげるにいたった。堺の勢力が絶頂に達したのは永禄ごろ、すなわち一五六〇年代で当時日本を訪ずれた耶蘇会（イエス会）宣教師の記録によるとヴェネツィアのごく執政官によって統制され、共和国のごときおもかげをもつといわれるほどであった。ところが織田信長が畿内を制圧するにいたってその武力的圧力の下に堺は都市的自立は打ち破られ一五六九年（永禄一二）には信長の直轄領とされた。ついで豊臣秀吉が大阪に大城郭と市街を建設するにおよんで町民は多く大阪に移住させられた。しかしこの急速に発展した商品経済の伸張と、南蛮貿易の展開により堺の繁栄とともに文化、芸能、技術の面、たとえば茶の湯、連歌、出版、医術、織物、鉄砲生産などにはなばなしい発展を示した。江戸時代になり幕府は豊臣秀吉にひきつづいて直轄領とし堺奉行を置いて支配し長崎、京都、大阪の商人らとともに中国から生糸（白糸）輸入の独占的利益を与えたため堺は一七世紀においてもその経済的繁栄を維持したがやがて畿内における最大の商業市場としての地位を大阪に奪われまた鎖国とともに海外貿易の利益も長崎に独占されたため一七世紀末の元禄のころからはしだいに繁栄を失い、わずかに金属工業、織物工業を中心とする大阪湾口の地方経済都市に転落した。しかし明治になって工業都市として再生し現在は大阪を中核とする阪神工業地帯となって繁盛をとりもどした。

堺商人の自治

堺商人とは室町時代から江戸時代にかけて堺に勢力をはった商人をいう。堺商人の名が著しくなるのは「対明貿易」が発展する一五世紀末からで大陸貿易ならびに畿（き）内を中心とする国内市場が発展することによって堺に巨額の商業資本が蓄積された。湯川宣阿、小島三郎左衛門などは代表的な巨商であった。堺の繁栄が絶頂に達する一六世紀、会合衆（えごうしゆう）と呼ばれる都市長老はいずれも富裕な貿易商人や納屋（なや）貸の商人、すなわち問屋などであった。能登屋、臙脂（べに）屋、日比屋了慶などの豪商の名が著しい。津田宗及、今井宗久、武野紹鷗、北向道陳、千利久、山上宗二などの茶の湯に盛名をはせた者もいずれも富商で安土桃山時代の文化に貢献するところ多大であった。その他南蛮貿易で呂宋（るそん）助左衛門の異名を得た納屋助左衛門、鉄砲製造の橘屋又三郎、歌謡の高三隆達（たかさぶりゆうたつ）大名となった小西行長などがある。江戸時代になって大和川改修を志した布屋次兵衛、堺港の改築者である吉川俵右衛門、浄瑠璃の竹本春太夫、同咲太夫らの名も逸することができない。

ロ、御陵（みさざぎ）

応神天皇陵

羽曳野市誉田

恵我藻伏岡（えがのもふしおか）ノ陵といい誉田八幡に接して北面している。仲哀天皇の皇子で母は神功皇后、武内宿禰が補佐したことは知られる。陵は三段づくりの前方後円墳で前後の主軸の長さ四一五m、表面積一一万一八五〇m^2、この塚を形成する盛り土の量は一九三万三九六〇m^3と計算せられ、この建設に使われた人夫の延べ人員は二〇〇万人を下らないといわれ堺の仁徳天皇陵とならんで大きさにおいてはわが国屈指の大陵である。この時代は大和朝廷の威勢が急激に増大、確立したことを物語るもので周囲に八個の陪塚がある。

前方後円墳は形式から見て前、中、後期の三つの年代に分けられるが前期のものが丘陵の頂上や丘尾を切ってその形を整えられたのに対して最盛期（四世紀後半から五世紀にかけて）この応神陵や堺の仁徳陵は丘陵地帯からはなれ、いくつかの陪塚を

従え整美なものになっていることが注見される。

仁徳天皇陵

仁徳天皇陵は堺市大仙町にあり百舌鳥（もず）耳原中ノ陵といい、俗に大仙陵と呼ばれる。歴代の天皇の陵墓では広さにおいて最も広域といわれるが三段造りの前方後円墳で三重の堀をめぐらし、周囲二七一八m、前後の主軸の長さ四七五m表面積一〇万四一三〇m²人工的に盛り上げられたもので築造当時の土量一四〇万五〇〇〇m²余と計算されている。これだけの土を運ぶには五トン積みのトラック五六万余台その運搬だけで一日一〇〇〇人を使って四ヵ年を要すという。これが築造されたのは五世紀の初めごろで、このような巨大な権力を持つ、応神仁徳天皇の二代がつづいたことは大和朝廷の発展と深いつながりを持つものと見られている。周囲には一二個の陪塚（ばいづか）がある。

反正天皇陵

反正天皇の御陵は北三国丘町二丁にあり百舌鳥耳原北ノ陵といい通常井山または三国山と呼ばれる。南海電鉄堺東駅の東方にあり面積四万m²周囲に堀をめぐらして広大な前方後円墳である。前方後円墳は前方が方形（四角）後方が円形で埋葬の主体部が後円部にある塚（つか）。わが国古墳時代独特の高塚式墳墓で車塚、瓢塚、二子塚、銚子塚、茶臼塚などとも呼ばれる。

履中天皇陵

御陵は上野芝町にあり国鉄阪和線上野芝駅の北方にあり百舌鳥耳原（もずのみみはら）南ノ陵という。周囲は二km余り、前後経三七一m前方部の幅二三六m後円部の高さ一八m面積一七万m²の広大な前方後円墳で四個の陪塚を持っている。

ハ、大鳥神社　鳳北町所在

大鳥連（むらじ）の祖神天ノ児屋根命に日本武尊を配祀、和泉の一の宮として崇敬されている。日本武尊を祭神に加えたのは白鳥伝説によるもの、本殿は大正初年の再建であるが大鳥造りとして出雲大社につぐ古い様式を伝えている。四月十三日に花摘（はなつみ）神事が行なわれる。

ニ、百舌鳥八幡宮

百舌鳥八幡宮は百舌鳥赤畑町にあり南海電車高野線百舌鳥八幡駅の南方六〇〇mにあり、応神天皇を主神として住吉、春日両神をまつってある。広い境内には森あり丘あり池あり広場ありで近在の人々に親しまれている。境内の老樟は天然記念物である。

ホ、本願寺堺別院　神明町東三丁

文明八年（一四七六）本願寺第八代蓮如上人がこの地に信証院という一坊をつくり、しばらく住んでいたことがある。北の御坊と呼ばれ現在の建物は文政八年（一八二五）の再建である。

ヘ、妙国寺

慶応四年（一八六八）二月フランス水兵が堺港に上陸したとき堺警備の土佐藩兵と衝突してフランス士官以下一一人が殺された「堺事件」があった。その責任を問われて同月二三日小隊司令箕浦猪之吉以下二〇人が妙国寺で切腹することとなったが検視のフランス士官が途中で恐れをなして一一人で中止となった。維新前夜の悲しい事件の一コマである。（材木町東三丁）

ト、鉄砲の碑　櫛屋町ザビエル公園内

天文年間（一五三二～）堺の貿易商人、橘屋又三郎が琉球へ渡ったとき、漂着のポルトガル人から鉄砲を買いうけ堺へ帰ってその製造をはじめた。それ以来堺は鉄砲の町として戦国時代に名をなした。碑は堺製の鉄砲の試射場に寛文四年（一六六四）に建てられたもので「放鳥銃定限記」にきざみ鉄砲の歴史や弾丸の着弾距離なども記されているが文字が摩滅して判読できない。また橘屋又三郎がポルトガル人から鉄砲の製法を伝習してその製造をはじめた所がある。桜之町付近で南海電車阪堺線綾之町停留所から北二〇〇mほどにある。江戸時代には大道をはさんで東西にわたり榎並屋、芝辻、井上等の鉄工業者が集団居住していた。

チ、陶器山古代窯跡　岩室、高蔵寺

市の南部旧泉が丘町と狭山町との境いに近いあたりは「崇神記」に見える茅渟県陶邑（ちぬのあがたすえむら）の地で「延喜式」にあげられている。いろいろな須恵器もここでつくられたもので古代以降延喜式制定（九六七）のころまで引きつづき製陶工業地帯であった。陶器山窯跡群は谷にのぞむ西南傾面にのぼり窯が数基残っている（顕彰史跡指定）昭和三一年一〇月通称つくもり坂の東側にある狐山塚が新設中学校の通学道として切りくずされたとき六世紀半頃のねりがね長さ四三cm幅八cm厚さ三mmが発見されたことは珍らしい。この古墳にものぼり窯の跡がありその上層部に三組の須恵器が特異なならびかたで埋まっていたが、これは窯の神をまつった跡だろうといわれている。さらに同三五年六月に同地高蔵寺の土取り場からのぼり窯が発見された。

リ、千家代々の墓　南旅籠町東三丁南宗寺内

堺の有名な茶人「利久」は俗称を納屋（なや）与四郎といい秀吉につかえて三千石を得茶道を大成したが秀吉の意にさからって天正一九年（一五九一）二月二十八日切腹を命ぜられた。年七五歳屋敷跡は南海電車阪堺線宿院停留所西の辻を南へはいる堺市民病院の東側にある地であるが僅かに一碑が建っているのみである。利休の墓は京都大徳寺聚光院にある。堺市南宗寺にあるのは遺髪を埋葬したもので表、裏、官休庵の千家代々の墓がそれを取りまいている。

ヌ、与謝野晶子の歌碑　阪堺線宿院ー大小路中間

与謝野晶子は明治一一年堺市の旧家菓子商「駿河屋」に生れた。旧姓鳳（おおとり）堺市立女学校卒業ののち史学、国文学を独習、また諸雑誌に作歌を投稿して歌壇に知られた。同三二年大阪で与謝野寛と知り合い翌年上京し

て新詩社に入り作品「明星」に発表した。同三四年処女歌集「乱れ髪」を出版して寛と結婚した。寛と共に「明星」「スバル」により近代短歌のロマン派を代表した。その生家跡（大道甲斐町にあったが都市計画で道路敷）となった。二〇回忌を記念して昭和三六年五月に

海こひし潮の遠鳴りかぞへつつ
小女となりし父母の家　晶子

の歌碑が建てられた。

国立劇場（仮称）と府民運動

読売新聞（一月十日）に「文楽が守れる」の見出しで予算復活要求で「大阪国立劇場」に調査費が認められ計上されたことを報じた。既に大阪府、市、および大阪商工会議所が一致して文楽保存を中心とする大阪国立劇場（仮称）の調査費を要求して来たのが今回これが認められたことを東京の市、国家予算対策本部から連絡を受けた。大阪市は「ナニワの伝統芸術が守られる」と喜こんでおり体制作りを急ぐことにしているとある。その額は百四十一万五千円であるが文化庁の芸術文化振興調査会総費のうち「大阪の文楽保存振興に関する調査費が認められた。文化庁は「文楽会館とか国立劇場建設の調査費にあてる」とある。この記事は卯年の初頭を飾る府、市民への贈物としては誠に喜こばしいことである。これについて大島市長は単に文楽だけでなく漫才、落語など上方の古典大衆演芸の上演や近松門左衛門、井原西鶴などの上方の生んだ劇作者の資料館さらに後継者養成のけいこ場などを兼ね備えた幅広い古典芸能センターにする意慾的ユニークな構想を明らかにしている。名もない市井の一私人が拙ない雑文を草した所以のものはこの浪速の地庶民の力によって三〇〇年余にわたり培かってきた文華、庶民の生活の「やすらぎとうるおい」を絶（た）やすことなく後世に伝えるは勿論のことこれをさらに発展させなければならないとの現代に生を享ける者の責務を感ずるからである。この調査費はいまなお政府予算編成の段階であるが、こいねがわくば速かに五十年度予算として成立し更らに国立劇場建設費が確立されんことを鶴首かつ祈念するものである。

むすび

文華の発生についてはそれが発生するための自然環境が保全、存続することの必要性について既述したところである。一言にしていうならば魚のおよぐ川、小鳥の住む森、そこで清潔な水をのみきれいな大気を吸い且つ伝性病の脅威のない良好な自然環境、進歩と調和のある生活環境でなければ健全なよい「生活のやすらぎやうるおい」は決して育つものではない。日常生活が騒音に悩み、薬物や工場排水に汚された水、農薬に汚された農作物、光化学スモッグに悩まされかつ日照権まで奪われ、天然の雨水を貯えた森林、山までが開発の名においてあくなき人々によって破壊され、又は破壊されつつある。

かかる環境下において天より与えられた生命が良好に保たれるであろうか？否人類のみならず生きとして生きる動物はもとよりあらゆる植物など人をとりまく環境が破壊されまた、破壊されつつあるのが現状である。しからば現代人として自然よりの恵与された環境を如何にして保存し、かつ後世に引継ぐべきか、これに対処する必緊のことは昨年六月東京で開催された「国際植生学会日本大会」において、「国民会議」の名において採択宣言された「自然保護憲章」（まこと第八号掲載）の実践項目を速やかに、かつ忠実に実践すること以前にはあり得ない。ここに声を高らかに再度これを提唱するゆえんである。

終りに臨んで多くの文華に関係する文献を残念ながら掲載することを逸脱したことについてはその責の重大なるを感じて世の識者と心ある方がたにお託びする次第である。なお文中「世界大百科事典、ニューオウサカガイド、および大阪市文化財」などを諸所に引用したことについてここにあらためて敬意を表します。

妄言多謝乞ご叱正（一月二十五日稿）

不許複製
発行所
財団法人大阪防疫協会
大阪市天王寺区逢坂上之町七二
大阪府庁天王寺分館内
電〇六（七七二）二〇五五
発行人　辻野　直三郎